国語

語句
文法
内容理解
文脈把握

1

次の文章を読み、あとの(1)～(7)の問いに答えよ。

1 身体[A]の与える感動は全身的[B]なものだ。たとえば体操選手が妙技を披露するとき、人はただ単に目に見える美しさに打たれるわけではない。その呼吸、呼吸が感じさせる生命の音楽に全身が反応し、感動するのだ。これが文字を持たない民族はあっても、舞踊や遊戯を持たない民族はないことの理由である。

2 言うまでもなく、身体もまた自然である。舞踊であれ遊戯であれ、すなわちダンスであれスポーツであれ、身体演技とは自然との対話にほかならない。人はそのとき、自身の身体に、また他人の身体に、全身で聞きいっているのである。身体もまた考えているのだ。

3 また自然とは、ソクラテス以前の自然哲学においては、自身のうちに運動の原理を内蔵し、おのずから生成消滅するものとみなされていたが、プラトン以降、人間の制作行為の単なる対象、無機的な材料に成り下がってしまった。この自然観はそのまま身体観でもありうる。人間が自然を支配するように意識が身体を支配するという考え方は、ヨーロッパ近代を貫通している。今なお常識として通用しているとさえ言っていい。だが、この考え方は、世界史をさかのぼり、その全域を見直してみると、逆にきわめて特殊なものに思えてくるのである。

4 たとえば年齢の問題がそうだ。若さとはヨーロッパの発明であると述べたのは吉田健一だが、そのとおりだろう。ヨーロッパ近代においては、老いはまさに負の要素であり、負い目そのものだった。若さを美徳とするこの考え方の背後に、生産第一主義が潜んでいることは疑いない。効率よく生産するには青年の方が適している。だが、人生を豊かに過ごすという意味での消費第一主義の見地に立った場合には、事情が違ってくる。見事に老いたものもまた価値を有するのである。事実、かつての日本においては、若く見られることの方が恥ずかしいことだったのだ。

5 ヨーロッパが育んだ舞踊の典型であるバレエも若さの芸術である。老いてしまっては、バレエは踊れない。スポーツと同じだ。だが、それが舞踊や遊戯に普通のことかと言えば、そうではない。

6 数年前、井上八千代の舞いを見てその呼吸に驚嘆したことがある。〈ア〉時を経るにしたがって印象がかえって鮮明になってくるのが不思議だが、まるで幼子のようだった。〈イ〉こういうことはバレエにおいてはまずありえない。〈ウ〉ヨーロッパと日本では、身体についての考え方が根本的に違うと言うべきだろう。〈エ〉身体観、さらに言えば自然観が違うのである。老いは身体の自然である。自然を操作し支配しようとする姿勢と、逆に、おのずから生成消滅する自然の声に謙虚に耳を傾ける姿勢との違いが、老いをめぐる考え方にもそのまま反映しているように思われる。とはいえ今では逆に、日本の方がはるかにヨーロッパ近代を実現してしまっていると言うべきかもしれない。日本の古典舞踊に熱い視線を注いでいるのは、むしろ欧米人の方ではないかとさえ思われる。

7 新体操やシンクロナイズドスイミング、フィギュアスケートなど、美しさを追求する芸術スポーツの登場が、オリンピックを変える契機になるかもしれない。身体の芸が与える感動とは何かと真剣に問いはじめるならば、オリンピックはいつまでも若さの祭典であるわけにはいかないだろう。オリンピックが、本来的な意味での身体の祭典であろうとするならば、いまや老いの問題こそ最大の焦点でなければならないだろう。

（三浦雅士「考える身体」による）

(1) 文章中の[A]の と意味・用法が同じ「の」を次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 男がやって来たのは、昨夜遅くだった。
イ 励まそうとする友人の言葉に感謝した。
ウ 弟は一人で、風の鳴る丘に立っていた。
エ 計画が実現するのはいつのことなのか。

(2) 文章中の[B]全身的 のように語尾に「的」がつくものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 事実　イ 画期
ウ 簡素　エ 重要

(3) 文章中に C 若さとはヨーロッパの発明である とあるが、どのような意味か。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 人生を豊かに過ごすヨーロッパ人は、若い間にこそ生産に力を傾けるということ。

イ 世界史を見直してみても、若さという考えはヨーロッパ以外にはないということ。

ウ 若さこそが価値をもつという考え方を、ヨーロッパが生み出したということ。

エ ヨーロッパにおいては、効率的に生産できる若さに価値を認めるということ。

(4) 文章中に D 自然を操作し支配しようとする姿勢 とあるが、この立場からすると「老い」とはどのようなものであるか。「老いは」に続くように文章中のことばを用いて、**十五字以上、二十字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(5) 文章中に E 身体の芸が与える感動 とあるが、それはどのようなものだと筆者は述べているか。それを説明した次の文の a ・ b に入ることばを、文章中からaは**六字**で、bは**五字**で抜き出して書け。

身体演技という a から生まれる b に反応して生まれるもの。

(6) 文章中には、次の ［　］ 内の文が抜けている。この一文が入る場所として最も適当なものを文章中の〈ア〉～〈エ〉のうちから一つ選び、その記号を書け。

実際は、米寿を超えていたのである。

(7) 次の文は、文章中のどの段落について述べたものか。最も適当なものをあとのア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

前の段落までの主題を受けながら、主題によって考えられる一つの例として新しい話題を展開し、以降の段落にもこの話題が受けつがれている。

ア 2段落　イ 3段落
ウ 4段落　エ 5段落

文脈把握・語句
内容理解・文法

2

次の文章は、いとこ同士の幸治と静子と和江の三人が、幸治と静子の疎開先である和江の村の子供たちに交じって川で遊んでいる場面である。これを読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

「幸治さんは、あそこまで泳げないの？」と静子がいった。

「泳げるさ！」幸治はとっさに流れへ身を踊らせていた。平泳ぎで懸命に泳ぐ。いくら水をかいても流されて、和江と少年のいる橋杭が遠のいてゆくみたいだ。溺れたらどうしよう……。和江が手をのばして声をかけている。ようやく泳ぎつき、杭に指先がとどいたとたん、ほっとして水を飲んでしまったが、幸治は咳き込みながら橋杭にかじりつき、和江と少年を見あげて笑いかけた。

「おめえ、和江んとこさ来た疎開っ子だべ。」精悍な感じの少年はいった。幸治と同い年ぐらいだ。

「うちの隣の信やん。」と和江がいった。すると信男は橋杭のてっぺんに身軽に登り、全身を弓なりにして青空に弧を描くみごとな飛び込みをみせ、抜き手を切ってもどってくると、ぺろっと舌を出した。

「疎開っ子のおめえには出来なかんべ。」「幸治さんだって出来るべ。」和江が A いい、幸治が黙っていると、和江は丸太の中段に登り、足から飛び込んでみせた。

「和江みてえに、おめえにやれっけ？」B 信男はニヤッと笑った。

幸治は、信男のように橋杭のいちばん高みにまで登り、そこに立ち上がった。とても高くて膝小僧がふるえた。はるか下に青く澱んだ水面が渦をまいている。〈a〉泳いでいる和江が見あげ、川岸からは静子が見ていた。大勢の村の子供たちがいっせいに見つめている。痩せ細って、村の子供たちのようには陽灼けしていない自分ひとりが、みんなから挑まれ試されている気がして、C 幸治は勇気を出さねばと自分にいいきかせた。

「足から飛び込めや！　鼻さつままねえと、脳天さ水が入って痛えど！」信男が下から叫んだ。幸治は思いきって足裏で橋杭を蹴った。〈b〉信男に教えられたとおり直立して鼻をつまんでいたが、思わず眼をつむっている。光と風につつまれた裸の躰がそのまま宙にさらわれてしまったようで、水面につくまでひどく長い時間に思われた。〈c〉眼をひらくと、陽の光の射しこむ水中にいて、無数の泡が躰をくすぐりながら立ち昇っている。つま先が川底の石に触れたので、D 蹴った。息苦しいのに、容易に水面へ浮かびあがらない。早く、早く、と思った。〈d〉すると、まぶしい青空が見えた。それからはどのように泳いだのか覚えていない。足がついたので立ち上がると、橋杭からかなり流されていたが、川岸に泳ぎついていた。

静子が笑顔で手を振っている。幸治はわざと[E]、耳のなかに水が入っていたので、泳ぎなれた少年みたいに片足でけんけんをしながら頭の脇を叩いた。そうしていると、いつそばに来たのか信男が立っていた。

「この石さ、耳んなかさ入れたらよかんべ。」

照れくさそうに信男は白い小さな石を突き出した。陽に照らされて熱い小石を耳の穴にさしこむと、耳の奥で虫が鳴くような音がして、水が吸いとられてゆくのがわかった。信男も耳に小石をあてがって[F]眼を細めている。

「気持ちよかんべ？　ここさ寝んべや。」そういうと、信男は[G]笑った。[H]素っ裸の二人は河原の砂地に並んで腹這いに寝て、顔を見合わせ、しばらくそうしていた。

翌日から幸治は、河原で信男と遊んだ。三日もすると、幸治も橋杭のてっぺんに立って頭から飛び込めるようになった。最初のうちは水面に腹をぶつけてしまい、信男から「おめえのは蛙ぶつけだべ。」と笑われたが、信男だって時には胸や腹を真っ赤にして痛そうにしているのだ。

（佐江衆一「リンゴの唄、僕らの出発」による）

(1) 文章中の[A]・[D]・[E]・[G]に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　A＝怒ったように　D＝夢中で　E＝知らんふりをして　G＝媚びるように
イ　A＝懸命に　D＝一気に　E＝媚びるように　G＝素知らぬ顔で
ウ　A＝知らんふりをして　D＝懸命に　E＝怒ったように　G＝大げさに
エ　A＝媚びるように　D＝夢中で　E＝無言で　G＝知らんふりをして

(2) 文章中には次の[　]内の一文が抜けている。この一文が入る場所として最も適当なものを文章中の〈a〉～〈d〉のうちから一つ選び、その記号を書け。

突然、全身に水の衝撃をうけた。

(3) 文章中に[B]信男はニヤッと笑った　とあるが、この笑みには信男のどのような気持ちが込められているか。文末が「……**気持ち**。」で終わるように、文章中のことばを用いて**二十字以上、二十五字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(4) 文章中に[C]幸治は勇気を出さねばと自分にいいきかせた　とあるが、幸治がこのような行動をとった理由として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　みんなに飛び込みもできないひ弱な疎開っ子だと思われたくなかったから。
イ　みんなに病弱で気の毒な疎開っ子だと同情されたくなかったから。
ウ　みんなにお高くとまった疎開っ子だと敬遠されたくなかったから。
エ　みんなに口先ばかりでつまらない疎開っ子だと思われたくなかったから。

(5) 文章中の[F]眼を細めている　の用法として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　抽選で特賞が当たり、思わず眼を細めている。
イ　暗がりで探し物をするために眼を細めている。
ウ　背中をなでられながらネコが眼を細めている。
エ　相手の言葉が信じられなくて眼を細めている。

(6) 文章中に[H]素っ裸の二人は河原の砂地に並んで腹這いに寝て、顔を見合わせ、しばらくそうしていた　とあるが、この場面の内容として**ふさわしくないもの**を次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　くだらない意地を張り合ったことを照れくさく感じている。
イ　互いを友人として認めあったことに満足を感じている。
ウ　つまらない誤解が無事に解けたことに安心している。
エ　互いの気持ちが通い合ったことを感じて、喜んでいる。

(7) 幸治に対する言動からわかる信男の人物像として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　村の子供には意地悪だが、疎開っ子には優しい人物。
イ　弱者には高圧的だが、強い者には媚びへつらう人物。
ウ　初対面の相手には挑戦的だが、本当は臆病な人物。
エ　打ち解けるまでは強気だが、本当は人なつっこい人物。

(8) この文章の内容として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　不安や期待に揺れ動く思春期の子供たちの姿を、季節感や色彩のあふれる世界で描いている。
イ　自然の中で遊ぶことによって、境遇の異なる子供たちがしだいに心を通わせる様子を描いている。
ウ　傷つきやすい子供たちの心の動きを、都会と田舎の環境の違いを対比しながら描いている。
エ　戦時下の日本で、将来に不安を覚えながらも健気に生きる子供たちの様子を描いている。

古典　内容理解

3

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

或る医者ありけり。病むものあれば上下選まず、いとせちに心をつくしけり。いといたういやしきもの病めるありけり。薬箱出して薬調ずるに、その母なりける老婆の、つくづくと見て居しが、ねざり出でて、はばかりなることながら、思ふことにこそ侍れとて、いと云ひかねたるを、「何のことにてもあれ、思ふことは打あらはして言ひぬ」と云へば、つつましげに声ふるはして、「下に組み置き給ふ箱の御薬も給はれかし」と云ひけるにぞ、おもはずほほゑみて、「さらばあたへん」とて、下にありしがうちの障りなき薬のふたつみつ取り出でて調ぜしが、「かならずその薬はしるしあるべし」とかたりぬ。かく愚かなるものに、「この病には何といふ方剤調ずることなり。それは何々の薬を用ゆ。この箱の上の方におのづからいれ置きたれば、とり出して調ぜしなり。下に組みたる箱のとて、貴きいやしきのへだてはなし」と、まめだちて云ふとも、いかでか聞き分くべき。障りなくば、其心にまかするにてこそ、をかしかりけれ。

（松平定信「花月草紙」による）

（注1）上下選まず＝身分の高い低いに関係なく。
（注2）いとせちに＝たいへん誠実に。
（注3）いといたういやしきもの＝とてもひどく身分の低い人。
（注4）調ずる＝調合する。
（注5）つくづくと＝じっと。
（注6）はばかりなることながら＝おそれ多いことですが。
（注7）侍れ＝ございます。
（注8）打あらはして言ひぬ＝言ってごらんなさい。
（注9）給はれかし＝どうか下さい。
（注10）障りなき＝支障のない。
（注11）しるし＝効き目。
（注12）方剤＝処方した薬。
（注13）おのづから＝たまたま。
（注14）まめだちて＝本気になって。
（注15）いかでか聞き分くべき＝どうして理解することができようか。

(1)　文章中の A つくしけり、B ねざり出でて、D 云ひかねたるを、E ふるはして　について、次の各問いに答えよ。
①　動作主が**異なるもの**を一つ選び、その記号を書け。
②　①の動作主はだれか。最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから選び、その記号を書け。
ア　或る医師　**イ**　病むもの　**ウ**　母なりける老婆　**エ**　筆者

(2)　文章中に C 思ふことにこそ侍れ　とあるが、どのようなことを思ったのか。それが書かれている部分を文章中から**十八字**で探し、**はじめ**の**四字**を抜き出して書け。

(3)　文章中に F おもはずほほゑみて　とあるが、なぜほほえんだのか。その理由として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。
ア　老婆の欲深い考えがおもしろかったから。
イ　老婆に考えていたことを言い当てられたから。
ウ　老婆の発言が誤解であるとわかったから。
エ　老婆の貧しい様子があわれに思えたから。

(4)　文章中に G 貴きいやしきのへだてはなし　とあるが、この部分の意味として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。
ア　新しい薬と古い薬という意味で分けているのではありません。
イ　身分が高い人と低い人で区別をしているわけではありません。
ウ　めずらしいものとありふれたものというわけではありません。
エ　高級なものとそうでないもので分けてあるのではありません。

(5)　この文章で述べられていることとして最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。
ア　身分の低い患者には、処方する薬の説明をくわしくするのがよい。
イ　値段の上下にこだわらず、効き目のある薬を出すのがよい。
ウ　病気が重くない患者にも、きちんと薬を処方するのがよい。
エ　治療に支障がなければ、相手の望むままに処方するのがよい。